

平等院鳳凰堂のCG制作

研究年度：平成11年度～平成12年度

平成11年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：中村 貞男
(教養課程 教授)

共同研究者：樋口 文彦
(建築学科 教授)
豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

研究助言者：鈴木 志子
(フクシコンサルタント
株宇都宮市)

研究補助者：西岡 千嘉
(株ワークステー
ション 大阪市)

平成12年度

研究代表者：藤本 康雄
(建築学科 教授)

研究ディレクター：藤本 康雄
(建築学科 教授)

共同研究者：樋口 文彦
(建築学科 教授)
豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

遠藤 賢治
(映像学科 助教授)

研究助言者：鈴木 志子
(フクシコンサルタント
株宇都宮市)

研究過程の概要

平等院は平安時代を代表する浄土教寺院で、極楽の宝池を模す池と阿弥陀堂を中核にすえる本格的浄土伽藍の最初のものである。

定朝作の阿弥陀仏を安置する鳳凰堂は、天喜元年(1053)に落成し、深い軒をもち、中堂に翼廊と尾廊をのばす独特の姿は、浄土曼荼羅に描かれた仏殿楼閣をモデルとして建てられたといわれる。阿弥陀仏は、金色の二重天蓋をかざし、螺鈿を張り詰めた須彌壇に座り、周囲の壁に描かれた阿弥陀来迎図と小壁にかかる奏楽舞踏する52体の菩薩群(彫刻)、梁や柱の縹縹彩色に荘厳され、堂内は阿弥陀仏の来迎を立体的にあらわしている。

本研究の目的は、建立当時の鳳凰堂の姿と中堂の彩色の荘厳さをCGで再現することであり、本年度は2年の継続研究の最終年度である。初年度は中生の外観のモデリングを中村、翼廊・尾廊を樋口が担当し、堂内彩色を鈴木が担当した。そのデータをもとに、NHK きんきメディアプランが『よみがえる浄土の美～平等院鳳凰堂～』(実写およびCG 12分)として映像化した。これは12年5月より「国宝平等院展」として各地を巡行した。

本年度は、堂内天蓋などのモデリング残余作業および、前年度に作成されたデータをもとに、総括を藤本、シナリオ作成を遠藤、データ管理を市川、外観のレンダリングおよびアニメーションカットを樋口、堂内の同作業を鈴木、映像編集を豊原が担当し、「平等院鳳凰堂 - 浄土の美再現」として映像化した。なおNHK きんきメディアプランから伽藍およびその周辺景観のモデリングおよびレンダリング作成の要望があったが、技術・作業人員・設備において対応でき

なかった。しかし堂内の二重天蓋や光背などの追加モデリングやハイビジョン対応のレンダリングのアニメーションカットは、試行錯誤の作業にもかかわらず、鈴木 노력により高品質なものを作成し要望にこたえた。

研究成果について

藝術研究所のCG研究作品としては上述のごとく、「平等院鳳凰堂 浄土の美再現」(VHS 15分)を完成させた。

またNHK きんきメディアプランは、本研究の外観の建造物の形状データ、堂内のハイビジョン対応のレンダリング・アニメーションカットに、自社作成の伽藍およびその周辺景観のモデリングおよびレンダリングや実写などを加え、「よみがえる平等院・鳳凰堂」本編・CGフルバージョン(14分)、CGダイジェスト(5分)の2本を作成した。これは平成13年3月1日より、平等院ミュージアム鳳翔館にて常時放映されている。これには「CG制作協力 大阪芸術大学大学院」と注記されている。

これらの素材を生かしNHKテレビ番組が以下のごとく放映された。

- 1) NHK BS デジタルハイビジョン 90分 3月20日 全国放送
ハイビジョン特集「よみがえる浄土～復元京都平等院～」
 - 2) NHK 総合テレビ 50分 5月3日 全国放送
特集番組「華麗なる極楽浄土～宇治平等院復元」
 - 3) NHK 教育テレビ 30分 6月9日 全国放送
国宝探訪「平安の夢 極楽浄土～宇治・平等院～」
- 注) いずれの番組にも「CG制作協力 大阪芸術大学大学院」と注記されている。

研究の反省

質の高い、データ量の多いCGアニメーションプロジェクトには、コンピュータおよび周辺機器構成や常駐担当者、作業従事者の質と量の高度の充実が要求される。その意味で今回の課題に対する我々の研究姿勢は、当初必ずしも万全といえるものではなかった。経験の不足や見通しの甘さから、予測のつかない事態に対して、人員・設備とも後追いでやっと作業をこなしたというのが現状であった。したがって藝術研究所の研究成果作品は、最大の努力はしたものの、全体としてなおまとまるようにまとめたという感はまぬがれない。ただし鈴木 の担当した堂内彩色のレンダリングおよびアニメーション・カットは、大量作業の試行錯誤を強いられながら、同人の努力により非常に高品質なものに仕上がった。

その結果、平等院住職神居文彰氏より大変な評価と感謝を頂き、またNHKテレビ番組に取り上げられたことは大きな意義をもつものといえよう。

今後はこの度の経験を生かし、この種類のプロジェクトへの対応の方途を確立しなければならぬと考える。